

特集・揺れ動く中国の政情

# 「天安門事変」と中ソ関係

中<sup>なか</sup>嶋<sup>じま</sup>嶺<sup>みね</sup>雄<sup>お</sup>

(東京外国語大学助教授)

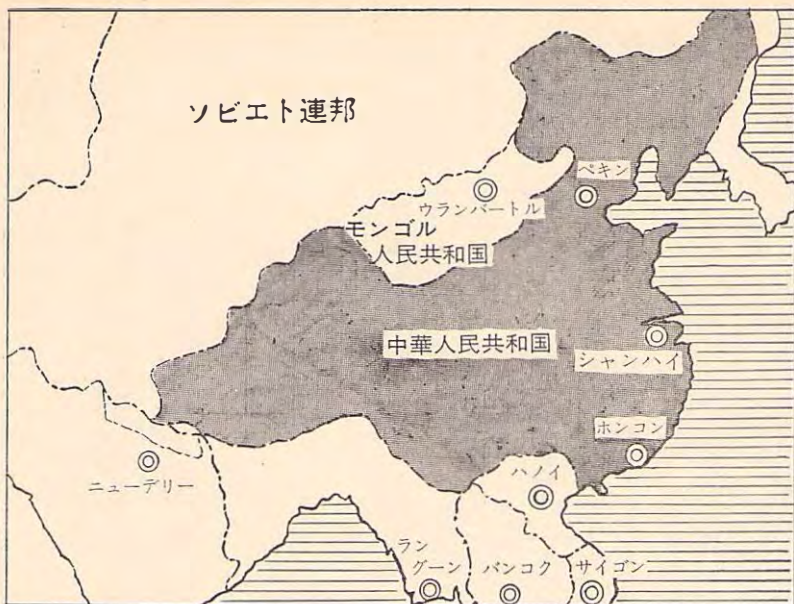
## 1 「スターリン批判」以後二十年

中ソ論争の一つの重要な契機は、ソ連共産党第二十回大会(一九五六年)での「スターリン批判」であったが、以来、はやくも二十年が過ぎた。この年、ソ連共産党第二十回大会に出席して非スターリン化の洗礼を受けた鄧小平・党総書記(当時)は、非スターリン化の衝撃が国際的に拡がりつつあったとき、十一年ぶりに開かれた中国共産党第八回大会で「党規約改正報告」をおこない、毛沢東主席の面前で、個人崇拜ないしは個人の神格化の弊害を指摘し、「われわれの任務は、個人をかつぎあげたり個人の功績や徳性をむやみにほめたたえたりすることに反対する中央の方針をひきつづきあ

くまでも実行し、指導者と大衆のつながりをほんとうにため、党の民主主義的原則と大衆路線をあらゆる面で徹底的に実行してゆくこととあります」(鄧小平「党規約改正についての報告」と述べたこと)があった。以来二十年、激動の中国の党内鬭争史における鄧小平氏の浮沈には、まことに印象深いものがあったが、ついに今回の「天安門事変」によって彼は再び失墜していった。

そして、毛沢東時代末期の今日の中国では、ちょうどスターリン時代の末期にスターリンと同郷のグルジア共和国出身者で公安警察(NKVD)を握っていたベリアが抬頭したように、毛沢東と同郷の湖南省出身で公安大臣(公安部長)である華国鋒が進出した。

この事実はたんなる偶然以上のものを含んでいるのかもし



れない（華国録は、山西訛りの言葉を話すところから出生は山西省との説もあるが湖南省の毛沢東の故郷・韶贛地区で工作してきたことには変りがない）。だとすれば、毛沢東以後の時代の華国録の政治的地位には不安が多く、やがて「すべてのことを知り、すべてのものを見、すべての人に代って考え、なんでもすることができ、彼の行為は絶対に誤りがないということになっていった人物」（スターリンにかんする「フルシチョフ秘密報告」）が中国でも断罪される日が来るのであろうか。

われわれがいま、このようなかたちで中ソ両国のアナロジーを試みることは、リスクの大きいスペキュレーションにすぎるのであろう。だが、歴史に同一はあり得ないとしても、歴史はくりかえさないといい保証もまたないのである。

ところで、今日、中ソ関係は、きわめて深刻な緊張をはらんでいる。そして、中ソ関係はこの二十年間、対立と抗争に充ち満ちていた。だが、いかなる国際関係にも変化のないものはないのであり、しかも、中ソ対立がすでに限界状況に至てから久しいだけに、その将来には、むしろ変化の可能性を見る方が自然であるのかもしれない。「天安門事変」が示した中国内部の情勢の流動化は、ソ連として、そのような変化の可能性への期待を高めているように思われる。そのような状況のなかで、去る四月二十九日、北京ではソ連大使館爆破事件という怪奇な事件が発生したのである。

2 「天安門事変」とソ連大使館爆破事件

このソ連大使館爆破事件にたいし、中国当局は、「これは反革命分子の破壊活動によるものである」（北京四月三十日ロイター＝共同）と語ったという。だとすれば、事態は、なお深刻な意味をもたざるを得ないが、少なくとも、この事件が「天安門事変」以降の中国内部における不透明な政治状況においてはじめて生じ得た事件であることは否めないであろう。その不透明な政治状況とは、換言すれば、「天安門事変」への党中央の処置にたいする大衆の不満や懐疑が大きく潜行しつつあると思われる。むしろけた政治不信の状況だといってもよい。それはなぜであろうか。

私は、「天安門事変」をもたらした潜在的基盤が、たんに北京のみならず、たとえば河南省の鄭州市でも同様の事件が清明節に生じて死者さえ出たことが認められているように、きわめて広汎に存在していたと考えている。それゆえ、今回の事件にたいする党中央の措置にかんしては、たんに鄧小平解任や華国鋒昇任が、現行憲法および党规約上の所定の手続きを経ていないという手続き上の問題のみならず、もっと本質なところで、大衆のあいだに不満や懐疑が広まりつつあるのではないかと思われない。なぜなら、党中央は、事件の本質を巧みにカムフラージュして問題の核心を論理上

すりかえ、すべてを鄧小平の「反革命陰謀」に帰しているからである。

すでに伝えられたように、「天安門事変」については、『人民日報』もその概要を報じ（四月八日付『人民日報』の労働兵通信員と同紙記者の共同執筆）、また、相次いで社説を発表して、今回の事件の性格を「走資派」の総帥・鄧小平が策動した「反革命事件」と断じた。つまり、今回の事件は、毛主席と党中央にたてつき、鄧小平擁護を企図した「一握りの階級敵」の陰謀だったと主張している。

だが、多くの在北京特派員の報道に加えて、各国の在外公館筋の情報や日中関係に従事している在北京の日本人の非公式報告などを総合するならば、事件は決してそのような単純な性格のものではなかったばかりか、まさに驚天動地の大衆反乱なのであって、毛沢東政治への批判と抵抗の根強さを示してあまりあるものであったといわねばならない。

今回の事件の参加者たちは、四月にはいるや、ただちに清明節に備えて準備をすすめていたといわれており、事件は決して自然発生的なものは偶発的なものではなかった。そして、日常的な治安上の警備体制をみても、公安警察、首都警衛団、首都民兵の三重の組織によって固められている北京において（しかも、これらの三系統の組織の責任を負っているのが、それぞれ、華国鋒、汪東興、王洪文・江青ら文革派指導者である）、百万を越える大衆が党・政府のコントロール



を脱して行動し、最後には、うち数方が、反乱を試みたことは、まさに中国という国柄を考えれば尋常ではあり得ない事件だったのであり、それほどまでに、毛沢東政治への批判と抵抗の底流が強く流れていたのだともいえよう。この点については、『人民日報』社説（四月十日付社説「偉大な勝利」）自身が、今回の事件の深刻さを認めて、「一、それは首都北京で起こった。二、それは天安門前広場で起こった。三、……なんとすさまじい反革命の情勢であることか」と三点を指摘している。

このようななかで大衆は、毛主席以外にたいしては万歳を唱えてはならないタブーを破って、「周恩来万歳、万々歳」を叫び、「江流」、「妖風」などの言葉が頻出する様々な形式の詩を書くことによって、明白に文化大革命の旗手・姚文之と江青夫人を批判したのであった。『人民日報』が今回の事件の背後に「反動的文人」の参加があったと指摘しているとおり、文革以後も残っていた北京の知識人がきわめて積極的に関与したことも認められている。とくに、毛沢東の前々夫人・楊開慧への哀悼が表示されたことに象徴されているように、江青女史への批判がもっとも明白に噴出したのであり、今回の事件は、このような毛沢東側近の文革派リーダーへの批判に根ざした、反文化大革命であると同時に文革派が亡き周恩来への追慕の情の発露を抑え、さらには今回の「走資派」批判運動を周恩来批判へと導びきかねないことへ

の激しい抵抗であったのである。こうした文脈のなかでの核心的なポイントこそ、周恩来対姚文之・江青という構図のうえにあったことを、鄧小平擁護のスローガンが、きわめて少なかったこととともに、おそらく中国民衆はいち早く認識しているものと思われ、それだけに、このような核心的な論点をすりかえた党中央への不信感はさらに高まったように思われてならない。私が、ソ連大使館爆破事件の起り得べき状況を最初に述べたのは、以上のような事情を考えただからにはかならない。

### 3 毛沢東以後へのソ連の期待

「天安門事変」に揺れる中国の内政不安は、一方で台湾政権を興奮させているが、同時にソ連を大いに勇気づけていることも事実である。私は去る二月の二週間、たまたま中国で「走資派」批判が激発しつつあったとき、ソ連科学アカデミーに招かれてモスクワに滞在していたが、周恩来死後の中国政情の流動化に直面したソ連は、「毛沢東思想」と毛沢東体制は将来、必ずや中国内部から転覆され得るとみなすソ連の中国認識の正しさが実証されつつあると考えており、従来以上に強気にソ連の対中国強硬策を堅持する気構えであった。ソ連の「覇権主義」を非難してやまない中国の対外姿勢にかんしても、逆に中国こそ、歴史的にも現状においても、まさ

しく「覇権主義」だとして、中華帝国の累代の「覇権主義」に言及し、今日では、南シナ海の群島群（西河群島、南河群島）まで自己の領域だといはって、社会主義のヴェトナムとさえ関係が悪化しているではないか、これこそ中国が「覇権主義」であることの証明であるというのである。ソ連の中国研究の大御所で現在はソ連外務省の史料調査局長も兼ね、一九六九年の中ソ国境会談にも参加したティフヴンスキー教授は、右のような立場から「中国の覇権主義」について、最近、大論文を書いている。

ここに見られるソ連の中国認識は、中国では当面文革派が抬頭するけれども、やがて毛沢東以後の時代には、中国民衆の力によって毛沢東の「悪政」が終焉するであろうとする点も含めて、皮肉にも、今日の台湾政権の見方とあまりにも近似しているといわざるを得ない。それかあらぬか、香港のある専門家は、毛沢東死後の中国に生ずる政乱に際し、ソ連、台湾、インドが中国を夾撃すると途方もないことまで推測しているのが（岳中石「毛沢東死後の大陸はどうなるか」、『中華月報』一九七五年九月号）、科学アカデミー東洋学研究所での私の講演のあとソ連の中国研究者と懇談した際、このような見解をどう見ると私が質問してみたところ、（私自身は、そのような可能性はほとんどないと考えている）さすがに、そのような可能性については一笑に付していた。しかし、毛沢東以後の中国にやがて親ソ的な政権もし

くは少なくとも毛沢東政権よりはソ連にとって好ましい政権が出現する可能性への期待は、中国の内政が流動的であればあるほど日増しに高まってゆくように思われた。

この点で注目されたのは、ソ連外務省極東第一部長のカーピャ氏の見解であった。カーピャ氏は、ソ連中国学界の実力者であり、中ソ関係史を専門とするが、モスクワ大学で教鞭をとるかたわら、ソ連外務省に籍をおいて、ソ連の中国政策を立案している責任者である。一九六九年の歴史的な北京空港でのコスイギン―周恩来会談にも同席しているのであるが、ソ連のアジア政策に関しては、今回、トロヤノフスキー前駐日大使が新任した極東第二部長のポストよりも、高い地位を担当している。そのカーピャ氏が一夜私を招宴してくれて、中国の将来や中ソ関係など、同様の研究者の立場で深夜まで語りあった。その会話のなかで、中国の現状認識ではソ連の見方と台湾の見方が近似しているけれども、台湾も蔣経国政権になった今日、台湾共和国への可能性があると考えるか、との私の質問にたいし、カーピャ氏が「五年前ならその可能性もあっただろうが、現在はもはやその可能性はないものと考える」と述べたのは、きわめて意味深長であったような気がする。五年前といえば、中国側もその事実を察知して激しく非難していたように、ソ連がヴィクター・ルイス記者を台湾に派遣して、ソ台関係の微妙な先行きが注目された時期であり、中国の国連加盟以前でもあったが、今

日のソ連としては、毛沢東以後の中国への期待が大きければ大きいほど、台湾との関係については、慎重かつ消極的になつてゐるようであり、やはりソ連にとって中国の存在があまりにも巨大であるのたいし、台湾の存在はやはり小さいものでしかなく、この事実がソ台関係に越えてはならない一線を画させてゐるように思われる。

カーピツア氏との会談でも確認できたことだが、日中平和友好条約の締結という懸案をもつわが国としても決して無視できない問題に、中ソ友好同盟条約の将来についての問題がある。私はかねがね、日中平和友好条約締結に際しては、中ソ友好同盟条約の将来を十分に見極めるまで待つべきだとの意見を發表してきたが、周知のように中ソ友好同盟条約は、日本をいわば「仮想敵国」にして一九五〇年に締結された軍事条約であり、中ソ友好時代のシンボルであつたものである。その条約が、この一九八〇年四月に三十年間の期限を満了するのである。しかし条項によれば、双方から一年前になんらかの通告がないかぎりこの条約は自動延長されることになつており、従つて一九七九年四月には中ソ双方はこの条約についての態度決定を迫られることになるのである。こうした背景をふまえての私の質問にたいし、カーピツア氏は、中ソ友好同盟条約締結時とは国際環境が大きく変わったので「条約の内容の改訂」があり得るとのきわめて注目すべき見解を語つていた。この場合にも一九七九年四月、つまりあと三年

弱の期間しか猶予はないのである。そして、この三年弱の猶予期間こそ、ソ連にとつても、中国にとつても、毛沢東以後の時代への重大な移行期として注目すべき時期なのである。この流動的かつ切迫した時間がどのように経過するかを十分に見つめたうえで、はじめてわが国は国家百年の計としての条約交渉をすすめるべきことははや論議の余地なきところであろうが、今回の訪ソを通じて、ソ連の政策決定者や専門研究者のなかに、中ソ友好同盟条約は不必要だとか、廃棄すべきだとの意見を述べた者は誰もいなかったことは、私にとつてもきわめて印象深い事実であつた。







巻頭言

議会政治の原点に立ち返れ

暴露旋風とアメリカ社会の動向 高坂正堯 4

国際政治 日本共産党の「変身」 勝田吉太郎 6

経済 好転の機運とその方向づけ 金森久雄 8

司法 一票の価値 奥原唯弘 10

教育 大学と学生をめぐる量と質の問題 西義之 12

社会 「暴走族」とは何か 島田一男 14

農業 非組織産業としての農業 川野重任 16

中小企業 中小企業の海外進出 小林靖雄 18

労働 賃上げのやり方を練り直せ 矢加部勝美 20

婦人 夫婦財産制をめぐる女性の意見 俵萌子 22

防衛 誰もいわないこと 曾村保信 24

福祉 老人医療の問題 小山路男 26

科学技術 非可逆性のこわさ 牧野昇 28

文芸 西洋医薬品と漢方薬 木村尚三郎 30

時点 視点

● 最近の経済動向と景気回復への施策

〈日共の「飯面」を剥ぐ〉

● 議会制民主主義と人民民主主義

大谷恵教 32

特集・中東問題を考える

〈座談会〉

● PLLO訪日代表団を迎えて

付・訪日日程および略歴

F・カッドウーミ  
C・エルフォート  
岩動道行  
大鷹淑子 51

● 中東の和平を願って、ニ采総裁、PLLO訪日代表団と会談  
● PLLO訪日代表団長カッドウーミ政治局長の答礼の言葉

● アラブ・イスラエル紛争の 歴史的背景と展開

佐藤正昭 63

● 中東和平への道

岩永博 70

外国特派員がみたニッポン

④ 日本人と政治

K・V・ナライン 76

特集・揺れ動く中国の政情

■ 「天安門事変」と中ソ関係

中嶋嶺雄 125

■ 天安門事件と中国の政治情勢

石川忠雄  
江頭数馬 131

弥三郎巻談

〈4〉 いいことば・わるいことば

池田弥三郎 156

ひずい

● 州立精神病院 斎藤茂太 112  
● 切手が語る神道指令 川井清敏 113

● 芳水・龍子・夢二 大熊良一 114  
● 悲しい話 三遊亭金馬 116

自由

● 勸進帳 宇野稔子 119

雑詠

岸風三樓選 122

俳壇

● 四月 遠藤梧逸 120  
● 桃の花 柴田白葉女 121

松崎鉄之介選 123